

F-10 大正後期女高師卒業生生活史の統計的特質

お茶の水女大家政 湯沢雅彦

〔目的〕約50年前に東京女高師を卒業したグループをコーホートの的に追跡調査し、同一年齢層女性コーホートと比較することにより、高学歴女性の生活史と老後生活における統計的特質を析出する。

〔方法〕大正10～14年に東京女高師（第六臨時教員養成所を含む）を卒業し、住所判明の健在者47名を対象とし、昭和49年7～8月に、116名訪問面接調査、301名郵送自記式調査した。回収率82.5%、有効票率77.7%。一般女性分の主資料は、総理府老人対策室「昭和49年・老後の生活と意識に関する調査」と厚生省統計調査部『昭和46年度人口動態社会経済面調査報告・高齢者』。

〔結果〕1) 教員勤務年数は、15年以上が59%で平均24.8年。未婚者ほど、夫が教員の場合ほど、出生子がないほど、使用人が得られたほど、適性ありと自覚した者ほど勤務年数が長い。2) 未婚率は11.4%で一般女性の約10倍の高さ、平均初婚年齢は26.8歳で、全国平均に比べ3.7歳高く、その時の夫年齢は5.6歳も高い。夫再婚率初婚の割合が高いことを推測させる。3) 既婚者の平均出生子数は2.7人で、昭和5年全国粗再生産率4.7人に比べ2人も少ないが、現在の健在子数は2.5人で全国に等しい。「少産少死型」の先例といえる。4) 老後（現在）の世帯構成は、単身、夫婦のみが44.8%と多く、子夫婦との同居が33.3%にとどまる。これは一般の傾向とかなり異なり、イギリスの分布に近い。同居の場合も、子家族との分離度が相対的に高く、別居子との往来頻度も一般より多い。扶養依存率が低く、経済的自立性が高い。